

教科・領域等 [国語・算数・生活科]

5 「主体的な学び」を視点とした授業改善の実際



国語科・算数科を関連付けた生活科の実際

こんな実践

国語や算数で学んだことを、他の場面や実際の生活に生かしてほしいという思いから、体験的な活動を取り入れながら生活科との関連付けを図った実践です。

実践学校 A小学校

実践学年 1学年

実践時期 2月

単元名「お店やさんごっこをしよう」

学習指導要領との関連 生活科 身近な人々と関わる活動(8)

国語科 話すこと聞くこと ア 算数科 数と計算 (2) イ(ア)

○「学んだことが役に立つ」という実感を持てる場を

学んだことを活用しようという意識が低い児童や、教科で学んだことが将来役に立つという意識の低い児童が見られるのは、1時間の授業や一つの単元が、子供にとって途切れたものになっていることに原因の一つがあるのではないかと考えました。

そこで、合科的・関連的な学習にすることで、子供たちが自然な形でその関連性を意識し、目的意識を持って

意欲的に学べるのではないかと考え、単元を構想しました。

「お店やさんごっこ」を、単元を通した活動に位置付け、相手を変えながら何回もできるようにしました。その中で、国語や算数、生活科の学習を織り込みながら、体験を通して各教科の資質・能力を育てることを目指しました。

単元の流れ	
「お店やさんをしよう」	
お店の商品の名前を集める	言葉の上位・下位概念【国語科】
お店やさんの準備	カードづくり【生活科】
100までの数の計算【算数科】	
お店やさんで使う言葉【国語科】	
お店やさん① クラスの友達と【生活科】	
お金を使った100までの数の計算【算数科】	
お店やさん② クラスの友達と【生活科】	
100までの数の計算【算数科】	
お店やさん③ 保護者と【生活科】	
お店やさん④ 来入児と【生活科】	
ふりかえり	

○2回のお店やさんごっこのやりとりから

1回目のお店やさんごっこでは、おつりの計算にとまどう姿がみられました。

- A 「おつりがわからない。」
 B 「100 玉そろばん持ってきたら？」
 A (100 玉そろばんを持ってくる。)
 B 「100 円にして。30 円だから残りはいくら？」
 A 「70 円」
 B 「そう。」
 A (どこか納得していない様子)

算数の時間には、 $100 - 30$ の計算をできていた児童が、実際のお金のやりとりの中では自信が持てず、友達からアドバイスをもらう様子が見られました。その様子から、実際のおつりの計算と、 $100 - 30$ という式がつながっていないのではないかと考えました。そこで、10 円玉を使って 100 までの数の学習する場面を設定し、2回目のお店やさんごっこをしました。

- A 「おつりやっぱりわかんない。」
 C 「先生に 100 円両替してもらえば。」
 A 「先生、両替してください。」
 T 「10 円何枚わたせばいいの？」
 A 「10 枚」
 A (10 円を 10 枚もらう) 「そういうことか！」

100 円を 10 円 10 枚と置き換えることで、納得する A さんの姿が見られました。代金とおつりの関係を 10 円玉と対応させてとらえることで、100 は 10 が 10 集まってできた数だということを体験的に理解することができました。また、おつりが、100 円から品物の値段を引いた残りだということに納得し、算数科で学習した $100 - 30$ でもとめられることとつながりました。

○4回目のお店やさんごっこに向けてめあてを考える

いよいよ来入見とのお店やさんごっこを行うことになり、めあてを考えました。

- T 「来入見のみんなとのお店屋さんをどんな風にしたいかめあてを決めよう。」
 A 「楽しくなかよくやりたい。」
 B 「喜んでもらえるようにしたい。」
 (めあてが「楽しくなかよくお店やさんごっこをしよう」に決定)

T「楽しくなかよくするためには、どうすればいいかな。」
 C「やさしく声をかける。」 B「『いらっしやいませ』とかだけじゃなくて、『これ
 やすいですよ』とか買いたくなるようなことを言ったほうがいい。」
 D「こまっていたら、近くに行って教えてあげる。」
 E「近くに行って『10円はこれだよ』とか教えてあげる。」
 A「やってあげるんじゃないかって、どうすればいいか教えてあげる。」
 T「もう自信持って教えてあげられそうかな。」
 B「まだちょっと自信ない。」
 T「もう1回練習する？」
 B「する。」
 (算数科の100円は10円が10まい $100 - 60 = 40$ など数問練習して
 お店屋さんごっこを始める)

自然と、子供たちから、他の教科で学習した内容がめあての中に出てきました。「困っていたら…」と相手のことを考えたり、どんな声をかけるかという具体的な言葉を考えたり、正しく計算したいというように、生活科や国語や算数に関するめあてが、立てられていきました。

○自信を持って関わることできた来入見とのお店屋さんごっこ

お店屋さんごっこが始まると、「80円です。100円でもいいよ。おつりは20円です。」と自信を持って計算し声をかける姿や、お店の中から出てきて、来入見の近くで教える姿が見られました。

また、「いらっしやいませ。おいしいケーキがありますよ。」

いちごのケーキどうですか?」「お金ちょっとしかなくても安くするからいいよ。」などお客さんが来るように、工夫をして声をかけたり、来てもらえるように値引きをしたり、来入見の残っているお金に合わせて値段を決めたりするなど、国語や算数で学んだことを生かして、自分から来入見に関わる姿が見られました。



○満足感を感じた4回目来入見とのお店屋さんごっこの振り返り

C「来入見の人たちがいっぱい笑っていてうれしそうよかった。」
 E「お金がなくなったら、50円のを5円にしてあげるとか工夫して、全部買ってもらえてよかった。」
 D「来入見のみんなが1年生になったら、また一緒にやりたい。」

- C「来入見の人たちがいっぱい笑っていてうれしそうでした。」
- E「お金がなくなったら、50円のを5円にしてあげるとか工夫して、全部買ってもらえてよかった。」
- D「来入見のみんなが1年生になったら、また一緒にやりたい。」
- F「がっきやさんのものをぜんぶかってもらってすごかったのしかったし、大きなこえでなん円とかおしえられてたのしかったです。」
- A「さいしょはドキドキしていたけど、「いらっしやいませ。」って大きなこえでいえてよかったです。さいごは、100円のを10円にしたり1円にしたりやすくして、おともだちもいっぱいいてうれしかったです。ほんとうに、ほんとうに、たのしくてうれしい一日でした。ケーキのしなものをいっぱいつくっておいてよかったです。」

お店やさんごっこを終えて、自分たちも楽しかったと同時に、来入見の人たちが楽しそうな様子だったことを喜ぶ姿が見られました。その楽しさは、今まで自分が準備をしてきたり、工夫をしたり、学んできたからだとすることも感じられていました。

このように合科的・関連的な指導が、子供たちのより主体的な学習につながると考えられます。



ここがポイント！

- ・わかるようになりたいという意欲を高めたり、できるようになったことへの満足感を高めたりするためには、実生活にあるものを教室に取り込むことが有効です。
- ・子供たちが自ら課題を持ち、意欲を持って次の学習に取り組んだり、自信を持って相手に関わったりするためには、単元全体を見据えて繰り返し取り組める場面を位置付けることが大切です。
- ・子供にとって確実に身についた力とするためには、教科の見方を生かす体験的で具体的な活動を取り入れることが大切です。

まとめ

実生活にある場面を教室に取り込み、合科的・関連的に扱い、単元全体を見据えて構想することで、主体的な学びが生まれてきます。その中で、本事例では、相手や場面に応じた言葉遣いや心遣い、実感をともなった数量の理解などが育まれました。これらは、各教科において目指す資質・能力につながっていくものです。